

〈礼拝説教〉 2013年9月1日

その日、すべての人に わが霊を注ぐ！

使徒言行録 10章 43節～48節、ヨエル書 3章 1～5節

武田真治

1. ペトロが話し続けていると

神様がキリスト教の福音を、ユダヤ人だけではなく異邦人へと運ばれて行かれた様子がこの10章には記されています。そこでは、使徒ペトロもローマの兵士コルネリウスも先導する神様の導きの勢いに圧倒されて、ただただ従って着いて行くだけになってしまっている点が面白くもあります。

今日の箇所もそのような面白さを感じさせてくれます。即ち「ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。」と。

ここでペトロはコルネリウスとその家族や友人達を前にして説教を語っていたのですが（その内容は34節から43節に記されています）、話し続けている途中に「聖霊が降った」と記されています。説教が終わらないうちに、あたかももう十分だという感じで「聖霊が降った」と。

私が面白いと思いましたが、説教が語り尽くされ、その内容をすべてちゃんと理解した者の上に「聖霊が降る」というのではないという点です。逆に言えば、必ずしも最後まで説教は語られなくてもよいということでもあるからです。

このような状態となり、ペトロはどうしたのでしょうか？ 私の話を最後まで聞けと尚も話し続けたのでしょうか？

続きは「そこでペトロは、『わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか』と言った。そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた」のでした。つまり、ペトロはもはや説教を続けることを止め、すぐに彼らに洗礼を授けていることが分ります。

2. 説教を語る目的とは？

考えてみれば、何のために説教は語られるのでしょうか？

説教とは、イエス様の福音を宣べ伝えることに他なりません。説教者は自らの語る事がイエス様の福音や聖書のみ言葉を正しく取り継いでいるかを常に自己吟味し、自問しています。そして限られた時間の中で説教者は、イエス様の福音をできるだけたくさん、分りやすく伝えようとどの説教者も必死になっています。けれども、その際にある大事なことを忘れがちになっていないかと今日の箇所は教えてくれているように思います。聖書の話がちゃんと記憶されることやメッセージがちゃんと理解されることは（それに越したことはないですが）最終目的ではないのです。説教とは、聴いている方々の上に「聖霊が降る」ことを何より求めて語られるからです。

どんなにすばらしい聖書の解説であっても、またリアルに聴衆に迫るお話であってもそこで「聖霊が降る」事がなければ説教の役割を果たしたとは言えないのです。逆に、どんなにつたなく、またまとまりのない説教であっても、聴いている方々が神様の聖霊に満たされたという経験や福音に心が揺さぶられるような思いを起こすならばそれは素晴らしい説教なのです。ここでペトロの説教はまさに「聖霊が降る」ことを起したのです。そうであるならばもはやその説教を続ける必要はないのです。説教は聖霊の働きに奉仕するものであり、聖霊が働いたならば役目を終わるのです。

このことは私たち説教者を謙遜にさせます。説教が聖霊の働く機会となるという事実は、説教を語ることに真剣に当たらなければならないと思わされますし、一方で説教は「聖霊が降る」ための手段にしか過ぎないということは説教者の傲慢を戒めます。いずれにしろ神様が用いて下さり、神様が働いて下さらなければ、説教そのものは何の価値も持てないものなのです。説教を途中で中断させられたペトロが怒ることもなく、むしろ神様の御業の先行に頭を下げ従っている姿こそ学ぶべき姿です。だからこそ彼は異邦人への洗礼を承認して行くことが出来たのです。

3. 「聖霊が降った」ということ

聖霊が降ったことでどのようなことが起こったかと言えば、そこにいた人々一同が

「異言を話し、また神を賛美している」状態になったとあります。

「異言」とは「舌で語る」という意味の言葉で、今はあまり行われなくなりましたが（それ故、逆に異言をすることを特別な賜物として強調する教派もありますが）、礼拝や集会でその場に立って、普段使っている言葉ではなく、そばで聴いている人たちが分からない言葉をしゃべりだすことを指します。特にここでは、あのペンテコステ（聖霊降臨日）の時に、使徒たちが外国の言葉で説教を始めたのと同じことが起こったということを表しています。ですから、今まではただ福音やみ言葉を聴くだけであった者たちが自分の口で、自分の言葉で福音を語り出したということを示しています。そして「神を賛美している」ということに説明は不要でしょう、讃美歌を歌い出したということです。これも自分の口で神様を賛美し始めたということを表します。このように真言にしる讃美にしる、それらを行えるということはもうその人には「神様への信仰がある」ということを証しする行為と言い得ます。ペトロの説教を聴いていることで人々の中に「神様を信じたい」という思いが芽生え、それが自分で抑えることが出来なくなって、思わず異言を話し、また神を賛美している」状態になってしまったのです。その様子を見て、彼らが「聖霊を受けた」ということをペトロは認めざるを得なかったのです。

このことはとても大切なことを示していると思います。それは説教を聴いていた彼らに「聖霊が降った」ことで、彼らの中にまさに「神様を信じたい」という思いが芽生えたのです。「聖霊」は信仰を起こすものなのです。「聖霊が降った」ということは彼らに信仰が与えられたということなのです。神様が聖霊を彼ら異邦人に降されたということは、異邦人にも神様への信仰を持つことが許された、福音を語り、讃美歌を歌うことが許されたということを明白にしているのです。神様が許されたのであるならば「この人たちが水で洗礼を受けるのをだれが妨げることができるか」とペトロは語り、洗礼を施すのです。説教はまさにそれを聴いて下さる方の上に「聖霊が降る＝信仰が与えられる」ことを望んで為される行為以外何ものでもないのです。

4. すべての人に福音が！

この地上に教会が誕生したペンテコステ（聖霊降臨日）の日に、ペトロはその出来事を解説しながら説教を語りました。その中でかれが引用した聖句が、先程読みましたヨエル書3章1～5節です。

この預言の言葉は「その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ」と始まります。今から思えば、あのペンテコステの時にはまだ完全にはこの預言は成就していなかったことが分ります。なぜならば、その時に聖霊が降ったのはユダヤ人にだけ限定されていたからでした。しかし、今や異邦人に聖霊が降ったことによって、本当の意味で「すべての人に」神様の霊が注がれたのでした。教会はこれからユダヤ人も異邦人も区別なく全世界に福音を伝えて行くようになります。これこそイエス様が望まれておられた「あなたがたの上に聖霊が降ると、エルサレムばかりでなく、地の果てに至るまでわたしの証人となる」ということがいよいよ本当になる時が来たのでした。そしてそのように導かれたのは先行する神様の恩寵、聖霊の導きであったのです。

（説教より抜粋）